

新
歌人群像

長沢美津

「女人短歌」のカリスマ

樋口美世



若き日より一筋に歌

長沢美津は、明治三十八（一九〇五）年石川県金沢に生まれ、平成十七（二〇〇五）年に大往生を遂げられた。百歳の賀を半年後にした現役最長老の死は、膨張し激変した明治大正昭和の歴史の崩壊を思わせた。

この世からわれが去りても美しく花咲く
ならむ庭の紅千鳥 【輪廻】

人生の終末近し手を振りてさらばさら
ばよ我とわが身に

襟巻きして帽子かむれば爺さんか婆さ
んかもわからずなるらし

重厚にして悠遠、飄々として悲しい歌だ。加賀百万石の城下町金沢に三男一女の一人娘として生まれ育ち、十八歳で上京し日本女子大国文科に入学。終生の恩師と仰いだ久松潜一博士の薫陶を得た。在学中に師の紹介で古泉千樫に師事。しかし千樫は一年余に長逝。その後は終生歌の師につかず、自ら「目白文学」を創刊し「青垣」を創刊する。その間、後の「女人短歌」につながる北見志保子、水町京子らを知る。大正十五（一九二六）年郷

里の長沢雄次と結婚して上京。一戸を構え三男一女の母となる。昭和三（一九二八）年「ひさぎ会」に入り今井邦子、若山喜志子、岡本かの子、中河幹子、阿部静枝らと交流。昭和四年に第一歌集『氾青』を上梓する。二十四歳の若書きであった。

まるけれどいまだは咲かぬ紫陽花の花
をうごかし雨ふり出でぬ

頬の肉強くゆりつつ汝が呑むは今わが
身ぬちになりし新母乳

久松師の序になるこの集は、師の千櫨に似ると評され母子抒情の絶品と賞讃された。かくして第二、第三歌集を出版し終戦を迎え、疎開先より罹災を免れた荻窪の家に帰京。安定した日々を過ごしていたが昭和二十三年、急逝した今井邦子の告別式の折に集まった女歌人たちの発案で女流のみの会を創ろうと相談した。結社に属している人もいない人も超結社の創設に賛同し発起人会をひらいて会の名を「女人短歌会」と決定した。

女歌興隆の実践に向けて

昭和二十四（一九四九）年に創刊された

「女人短歌」は女流のみの超結社として歌壇の注目を浴びた。会の発足を側面から促し助力を惜しまなかった折口信夫（釈・逍空）はアンチアララギで千櫨とは「日光」の同志であった。千櫨は死の前に女弟子は逍空にと言いつつ遺した。その言により女歌人らは「折口信夫の話聞く女性の会」などを開き積極的に新生面に向かって走りはじめたのである。

折口信夫の女歌人に当てた論旨をみると、「この果てに君ある如く」の序文「所謂未亡人短歌の含む暗示」（昭25）や「女人短歌」第二巻第四号の「女人短歌序説」（昭25）及び「短歌研究」の「女流の歌を閉塞したもの」（昭23）などであった。要約すると次の通り。

「今の女歌はぼうずがなさすぎて男歌に負けた。写生主義以後に栄えた現実主義が今日の行き詰りを招いた。アララギの失敗は女歌を殺し、女歌の伝統を放逐した。女流がアララギを讚美するのは間違いだ」と。

「女人短歌」は、まさに逍空の引いた路線を走る「女歌興隆」の実践者たちの未来行列車の乗客だったのかもしれない。

明治以来の歌壇は常に男流が中心で戦後まで続いてきた。女流のみの超結社などは予想外の出来事であった。明治四十四年、平塚らいてうにより創刊された女性解放誌「青鞥」

は、「アララギ」の存在を意識した女性解放運動の元祖であった。創刊号に「元始、女性には実に太陽であった。真正の人であった。女性性は月である。……私共は隠されてしまつた我が太陽を、今や取り戻さねばならぬ。自由解放」と宣言した。しかし六年足らずで終刊。原因は男女間の恋のもつれなどの醜聞が理由で当時の時代の歴史の大方は女性に不利に推移した。

例えば、妻が他の男性と不倫をすれば女性のみが姦通罪で罰をうける。戦前は婦人に参政権もなかった。理不尽で一方的な法律がまかり通っていた戦時をくぐり抜けてきた女性の意識が昂揚し、才気漲る女歌人らが組織化して力強く発足したのが「女人短歌」である。



返還の前年、沖縄を訪問した際の女人短歌会歓迎会。前列中央が美津。中列左から4人目が筆者（1971年）



左より筆者、美津、宮地伸一、川合千鶴子（1984年）

創刊号は、北見志保子を中心に阿部静枝、生方たつえ、川上小夜子、五島美代子が編集委員。長沢美津は、運営会計を司り事務所を引きうけ順調につき進んでいった。全国的な女歌人の超結社集団の誕生に対して、男性中心であった歌壇雀たちは「女のみ集まって何が出来たものか」と野次馬的なシビアナ目を向けていたが、沸騰する女人パワーを肯定せざるを得ず、男側からみて隆盛は期待外れだったといえよう。かくて半世紀近い歳月が流れ去った。

「女三人寄れば姦しい」どころか、個性的な数百名が集い喧喧囂囂論じ合い睦み合う賑々しさは、想像を越えた華やかな熱気に満ちていた。サロンのだと噂される一方、和やかさの裏に潜むライバル意識も存在する女の闘いの場でもあった。創刊号の宣言通り次々叢書を上梓し、男性側からの歌評などを得て歌壇の注目を浴び女歌人の実力を大いに発揮してゆく。昭和二十八年、女歌への助言を惜しまなかつたアンチアララギの折口信夫とアララギの大家斎藤茂吉が相ついで他界する。この衝撃は戦後昭和二十年代の一時代の終焉を告げるものとなり、新しい結社が出現した時代でもある。翌年に入り歌集『乳房喪失』で一躍名を馳せた中城ふみ子、寺山修司が話題を呼ぶとともに前衛派が台頭し塚本邦雄、岡井隆らが反写實的な新しい手法を生み出した。その流れは独自の境地を展開させた葛原妙子に及び、玲瓏にして重厚な歌の極致を披瀝させた。さらに齋藤史、森岡貞香、遠山光栄、真鍋美恵子など、有名無名の会員が競いあつた。やがて川上小夜子が逝去し創始者の北見志保子が他界して美津の責務は、さらに重くなつてゆく。月日は矢の如く流れ去り多くの先達が彼岸に去りいつしか超結社が美津を軸に結社的な形へと推移する。地道に忍耐強く会

の発展の為に一途な情熱を注ぎ尽くした人間的な魅力と牽引力の賜物であろう。終刊号に「私は加賀藩出身の縁の下の力持ち的存在が性にあつている事務所の小母さんだから」と書かれたが、没我的な謙譲の美德の持ち主でもあった。

ともかく、萌芽時より創刊、終刊へと四十八年間を全力投入で疾駆し「女人短歌」に寄与した美津は、まさに会の象徴的な存在であった。明治氣質の剛柔を合わせ持った稀有の女流歌人であり女歌の研究者であつた。

歌人学究の徒・主婦の座

美津の残した業績は多岐に及ぶ。最も貴重な仕事は、古代より現代に亘る研究書『女人和歌大系』全六巻の完結である。跋は土岐善麿。風間書房刊。現代歌人協会大賞を受賞。歌集二十四冊。随筆十冊。部類長沢美津家集。『女歌人小論Ⅰ・Ⅱ』『現代女人歌集Ⅰ・Ⅱ』『女性の見た歌枕』ともに共著。研究書は、昭和三十七年（五十六歳）より昭和五十三年（七十四歳）に至る十八年間を費した。古今の女歌人を網羅した歴史的価値のある大著であり、終生の恩師久松博士の指導を受けた。自死にて天逝した三男の七回忌に当たる巡礼



女人短歌会・壱岐対馬の旅で。中列中央の和服が美津、1人おいて右が筆者（1961年）

詠の歌集より。

雪のうへへのこりしつひの足跡を見にゆ
かむとしてひきとめられぬ

『雪』

名を呼べばふりむく思ひいつとなくく
り返しをりよびなれし名を
逝きし子の再びかへらぬことだけが日
毎にたしかになりてゆくなり

『雪』は、挽歌の絶唱として評価された。

その他に各誌への執筆も多く、数多の講演会
講師と多忙を極めながら、超然として多忙さ
をむしろ享受されていた。妻であり母である
主婦の座に甘んじることなく自己完成と会の
為に全身全霊を賭し、白寿までの生涯を全う

した女丈夫の生きざまは、こよなく尊く美し
い。昭和四十六年、國學院大学より「女性和
歌の史的研究」にて国文学博士の学位を取得。
昭和五十四年、勲四等宝冠章を賜った。平成
四年の歌会始に女性では二人目の召人となる。
昭和五十年に古稀を迎え東京・東伏見神社境内
に筆塚を建立。左の歌は碑面に刻まれている。

さす指の先をどこまでのばすなら心し
づまる処にとどく

美津の歌風は、一切の余剰を剥ぎ、真実と
は何かを追求し、対象に肉迫する姿勢を貴ぶ。
表現はあくまでも優しく平易に、本質的な自
己探求の余り、時には字余り字足らずの変則
的な韻律を招くが、独自の個性ともなってい
る。

三人の子歩みてゆくを遠みれば大きな
るも小さし小さきは更に小さき『垂水影』

何しろ二十四冊の歌集には無尽蔵に名歌秀
歌が充ちている。あえて好きな歌を二一首。

絵そらごと非在のものを恋ふなればあた
り明るむ月なき夜にも

『墨筆』

五十代は飛ぶやうに六十代は跳るごと
くに去りてゆきたり

『五黄』

春夏秋冬を和服で通した美津は、内外の旅
にも着物を持参する着道楽。ゆったりとした
着付けが身になじみ立ち姿が美しかった。さ
らに信仰心が厚く読経の声が忘れ難い。

禪宗の家に生まれて釈迦牟尼佛 真宗
に嫁し南無阿弥陀佛

『輪廻』

旅を愛し酒を好み唄を愛した美津は、男女
の性を超越した大物であった。私は胸にひそ
かに「両性具足有佛」と敬慕し続けてきた。男
性は尊重するが自説は「任げぬ芯の強さ。常に
前進あるのみの不屈の魂が大成を遂げ得た。
酒に酔い少女の如くはしやぎながら、旧制高
校の寮歌や戦前の流行歌を唄う。切れ味のよ
い刃物の鋭さとほろ酔い気分の無邪気さに惹
かれて多くの会員が行を共にした。打々発
止と火花を散らした論客も大方は去り、「去
る者は追わず来る者は拒まず」美津の美学は
悠久の彼方へ失せることはないだろう。

紫の終刊号を手にしたりなにもかもこ
れにておしまひ

『輪廻』

はからずも仰ぎたる空に虹ありて美し
かりき涙ながれぬ

(ひぐち・みよ「地中海」編集委員)